

授精課通信



授精師太田です！

6月にミシガン州で行われた“Alta Showcase Tour MICHIGAN”に参加しました。
今回はその中から2件の農場の繁殖管理について簡単に報告します。

WALNUTDALE FARMS

★搾乳頭数 2200 頭
(ホル 1650 頭 ジャージ 550 頭)
50 ポイント ロータリーパーラー

★乳生産
ホル 日乳量 40.8 kg
ジャージ日乳量 29.5 kg

★ジェネティックプラン (改良の方向性)
生産 40 健康 30 体型 30

★繁殖成績 妊娠率 25%



<サイヤーセレクト>

この牛群で使用する精液は“ヤングサイヤー”の中から5頭の種雄牛に絞って選定し、年3回の成績公表のたびに都度選定をくり返しています。

畜主のMr ケ빈は「生産能力が高く受胎率の良い牛を作りたければ、トップジェネティクスの種雄牛を使用するのが一番の近道だ」と言っていました。

多くの農場でジェネティックプランでの体型への重み付けが0%が殆どな中、この農場ではとくに「乳房の改良」を重要視しているため体型に30%の重み付けを入れていました。

近年、乳牛の長命性や管理しやすさに関わる改良は「体型からの改良」から「健康形質を重視した改良」にシフトしています。そんな中、乳房改良にこれだけの重み付けをおく農場は、過去に乳房の問題に関して苦労した経緯でもあるのでしょうか。

<ジェネティクプラン>

ジェネティクプランとは、自分の農場が未来どの方向へ舵を取りたいか示す“羅針盤”のようなものです。その方向性いかんで選ばれる種牛も変わっていきます。

繁殖検診などで現状の成績や課題を明確にする事によりサイヤーアナリストと話し合いながら、生産性を伸ばしたい、繁殖を良くしたい、乳房を揃えたいなど方向性を決める事を言います。

<繁殖>

この農場には“**Repro Tech**”という、人工授精だけではなく繁殖全般に大きく関与している技術者が出入りしています（Alta 社の職員）。

“**Repro Tech**”は毎朝 6 時に牛舎に訪問し、発情牛発見と無発情牛へのチョークペインティングをおこない、かつ発情牛への人工授精と妊娠鑑定をおこないます。

授精戦略は、分娩後 35 日から **Presynch-Ovsynch** というプログラムを開始し、分娩後 70 日にすべての授精対象牛への人工授精をおこなうようコントロールしています。

育成と初産には授精回数 2 回までは性判別精液を使用しています。通常精液では 0.5ml より 0.25ml 精液ストローの受胎率が良く、今では全て 0.25 ml 精液ストローを使用しているとのことです（日本は通常精液は 0.5ml です）。

WALNUTDALE FARMS は 5 年前から独自の牛乳出荷を始め、今では 5 件の農場で組合を作り牛乳販売をおこなってます。乳価の高いジャージ牛を飼養し、体細胞は 10 万以下を維持するよう品質にこだわっています。

ミシガン州では BST を使うと乳価が安くなるため今では、殆どの農家で使用されていないとの事でした。

PRAIRIE VIE DAIRY

★搾乳頭数 2400 頭

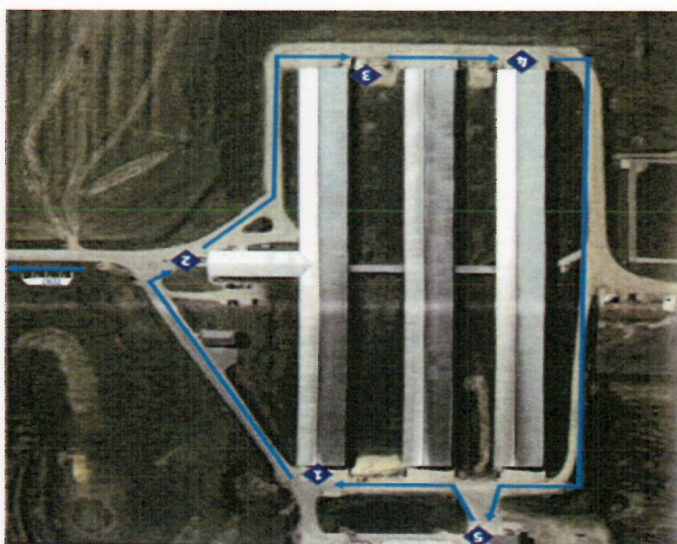
35 頭ダブルの平行パーラー

★乳生産ホル 日乳量 35 kg

★ジェネティクプラン（改良の方向性）

生産 70 健康 30 体型 0

★繁殖成績 妊娠率 30%



PRAIRIE VIE DAIRY は 2 年間、妊娠率 30%維持しています。基本的に Presynch-Ovsynch と W-Ovsynch で Timed AI される。それ以外に活動量計と Repro Tech が牛舎に来て発情牛を見つけ（ペイントを付けてまわる）授精を行っているが、徐々に繁殖プログラムを少なくして自然発情を多くする事が今後の課題のようです。

今は、性判別精液は積極的に使用しないで、現状の頭数を維持して生産を伸ばす事を考えているとの事です。ジェネティックプランの体型が 0%で生産が 70%なのは現状の頭数を維持して生産を伸ばす考えからだと思っています。

<Repro Tech>

視察に行った農場には Repro Tech が繁殖成績の向上に大きく関与していて、授精や発情発見、妊娠鑑定はもちろんのこと Repro Tech は毎日、牛の観察をしに農場を回っているのも牛の変化やカウコンフォートチェックも行なうなど繁殖の深い所まで関わりを持っています。授精師は授精するのが仕事ですが Repro Tech の仕事を見させてもらう事で、自分達の仕事に凄く可能性を感じる事ができました。



出生後 1 週間以内にインディアナ州で 6 ヶ月まで飼育されるので
今では使われなくなったハッチの数が凄いです。



最新式の連動
スタンションらしいです

丁度収穫時期で作業を見学していたら、トラクターなどで鎮圧をかけていましたが、日本では見かける事のない前タイヤがローラー状になっている専用重機でさらに鎮圧していました。殆どの農場ではバンカーサイロではなく、下地がコンクリートの所でスタックサイロにしていました。ユンボは使わないようで、余り傾斜は作らず鎮圧しやすいように作られていました。



去年のスタックサイロです



この機械で断面
を削るようです

今回の視察では初めてアメリカに行かせて頂きスケールの大きい農場、オーナーや従業員の考え方、Alta 技術者の方達の仕事を見せて頂くなど、とても良い経験をさせて頂きました。

THMS の授精課で出来る限りこの経験をチームで共有して現場に還元出るように頑張っていこうと思っています。